

氏名（本籍）	今坂 修一		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博甲第	7484	号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	動物介在活動が障害のある対象者及び実施者に与える効果		
主査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己
副査	筑波大学准教授	博士（学術）	水野智美
副査	筑波大学助教		升 秀夫
副査	帝京科学大学准教授	博士（心理学）	濱野佐代子

論文の内容の要旨

[目的]

本研究では、自閉症児の療育と脳性まひ児の社会的な活動に動物介在活動を取り入れることにより対象者として参加した自閉症児、実施者として参加した脳性まひ児に対する動物介在活動の影響を唾液アミラーゼ活性値にて評価することを目的とした。具体的には、以下の3点について明らかにする。

- ① 自閉症児の触覚、固有覚、前庭覚の感覚を使った課題活動に犬を参加させた動物介在活動を実施し、対象者として参加した自閉症児の心理的ストレスに対する動物介在活動の影響を唾液アミラーゼ活性値により評価する。
- ② 脳性まひ児が高齢者に対して実施するレクリエーション活動に犬を参加させた動物介在活動を実施し、実施者として参加した脳性まひ児の心理的ストレスに対する動物介在活動の影響を唾液アミラーゼ活性値により評価する。

[方法]

1. 自閉症児における動物介在活動の対象者としての効果（第2章）

（目的）

自閉症児に対する感覚刺激を使った療育課題に犬を介入させた動物介在活動を実施し、対象者として参加した自閉症児の心理的ストレスに対する動物介在活動の影響を唾液アミラーゼ活性値により明らかにする。

（方法）

1) 対象児

心身障害児通所施設に通園し、医師により自閉症スペクトラム障害があるとの診断を受けた4名

であった。内訳は、4歳男児1名、5歳男児2名、5歳女児1名であった。

2) 介在動物

介助犬候補犬として訓練を受けた9歳令の雌のラブラドル種（以下、活動犬）1頭であった。この活動犬は、動物介在活動に6年間以上従事しており、レクリエーション活動に必要とされる動作に対して十分に訓練、訓化されている。

3) 手続き

1セッションは20分間として、対象児は触覚、固有覚、前庭覚の課題を実施した。触覚課題ははめ板、固有覚課題は綱引き、前庭覚課題はサーキット課題を設定した。対象児は、ベースライン期では課題を施設指導員と行い、ベースライン期終了後、同様の課題に活動犬を導入した動物介在活動を行った。

対象児の動物介在活動実施時における心理的ストレスの変化は、ストレスのバイオマーカーである唾液アミラーゼ活性値を測定し、指標とした。測定は、活動開始前5分以内（活動前）、ベースライン期終了時（以下、活動犬介入直前）、活動終了後5分以内（活動後）の3フェイズに行った。

2. 脳性まひ児における動物介在活動の実施者としての効果（第3章）

（目的）

脳性まひ児が訓練された犬を誘導して動物介在活動を実施し、実施者として参加した脳性まひ児の心理的ストレスに対する動物介在活動の影響を唾液アミラーゼ活性値により明らかにする。

（方法）

1) 対象児

痙直・アテトーゼ混合型の脳性まひにより四肢に重度の障害のある16歳の男児1名。

2) 介在動物

介助犬の認定を受けることを目標に、介助犬としての訓練を対象児とともに実施している6歳令の雌のラブラドル種1頭（以下、訓練犬）であった。

3) 手続き

対象児は実施者として、特別養護老人ホームに入所している高齢者4名に対し、訓練犬を使用しないレクリエーション活動をベースラインとして行った後、訓練犬を導入した動物介在活動を実施した。具体的な活動内容は、訓練犬を使用しないベースライン期では、会話、施設職員の補助による玉入れなどのレクリエーション活動を行い、訓練犬介入後は、同様の活動を施設職員に代わり訓練犬を誘導して実施した。

対象児の動物介在活動実施時における心理的ストレスの変化は、ストレスのバイオマーカーである唾液アミラーゼ活性値を測定し、指標とした。測定は、活動開始前5分以内（活動前）、ベースライン期終了時（以下、訓練犬介入直前）、活動終了後5分以内（活動後）の3フェイズに行った。

〔結果〕

1. 対象者として参加した自閉症児における結果

3課題の5分間のベースライン期及び10分間のベースライン期における唾液アミラーゼ活性値は、すべての対象児で有意な増加、または有意ではないが増加傾向が認められた。

障害の程度が軽度な2名では、5分間のベースライン期、または特定の課題で唾液アミラーゼ活性値の有意な増加が認められた。障害の程度が比較的重度な2名では、10分間のベースライン期にすべて

の課題で唾液アミラーゼ活性値の有意な増加が認められた。活動犬を介入した活動後における3課題の唾液アミラーゼ活性値はすべての対象児で、有意な減少、または有意ではないが減少傾向が認められた。

2. 実施者として参加した脳性まひ児における結果

5分間のベースライン期及び10分間のベースライン期における対象児の唾液アミラーゼ活性値は、有意に増加した。ベースライン期に有意な増加を示した唾液アミラーゼ活性値は、訓練犬を介入した活動後では、有意に減少した。

[考 察]

ベースライン期における対象児の唾液アミラーゼ活性値の増加は、施設指導員と1対1で対峙する環境下で課題に取り組む経験が少ないため、不安や緊張感が増加する活動であったと推察された。また、障害の程度が軽度な2名と比較的重度な2名では、課題に対する唾液アミラーゼ活性値の増加に異なりが認められ、課題に対するストレスの増加には障害の程度が関与していることが推察された。

5分間及び10分間のベースライン期に増加した唾液アミラーゼ活性値は、活動犬を介入した活動後では有意な減少、または有意ではないが減少傾向が認められた。活動犬の介入により活動環境や雰囲気の変化し、対象児の不安や緊張感が緩和されたものと考えられた。

審査の結果の要旨

(批評)

自閉症児の触覚、固有覚、前庭覚の感覚を使った課題活動に犬を参加させた動物介在活動を実施し、対象者として参加した自閉症児の心理的ストレスに対する動物介在活動の影響を唾液アミラーゼ活性値により評価した結果、対象児によって動物介在の効果には幅が存在したが、対象者の不安や緊張感を軽減させる一定以上の効果があった。

一方、脳性まひ児を活動の実施者として参加させ、高齢者のレクリエーション活動に犬を参加させた動物介在活動では、実施者として明らかな動物介在胃の効果は認められた。障害がある人を活動の実施者に位置づけてその効果を測定している研究は内外にもほとんどなく、非常にオリジナリティが高いと評価される。

以上、研究の意義、オリジナリティ、成果、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成27年1月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。